

木下杢太郎全集

第二十一卷

木下李太郎全集 第二十一卷 第十六回配本(全二十四卷)

一九八二年八月一日 発行

定価 三八〇〇円

著 者 太田 正雄

発行者 緑川 亨

発行所 緑川書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五

電話 〇三(二六五)四二二
振替 東京六三六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

日本遣歐使者記	グワルチエリ		一
大坂城に於ける秀吉	フロイス		一四
ルイス・フロイス千五百九十年日本年報			一七
ルイス・フロイス日本書簡	一五九一年一五九二年		二〇
伴天連書翰 に現はれたる	關白秀次の行狀と死と	フロイス	
日本の島とばつば	グレゴリオ十三世の聖座に恭敬を	ささげ奉る爲めにそこより渡り來れる公子たちとに	
關する短き記録	ベナツチ		三六
燉煌千佛洞の裝飾藝術	スタイン		四九
千九百二十二年の佛國絛情詩壇	ヌエツト		六一

巴里の雑誌	ヌエツト	三六八
佛國に於ける中學教育の改革問題	ヌエツト	三七四
FOUCHER 著「健駄羅藝術」序論抄		三八一
ユウリウス・マイエルグレエフェエの死	ケエニツヒ	四〇七
アクロポオル山上のアナトオル・フランス	セギユウル	四一九
後記		四三一

日本遣歐使者記

グワルチエリ

RELATIONI
DELLA VENUTA
DEGLI AMBASCIA-
TORI GIAPONESI
a Roma sino alla partita di Lisbona.

*Con le accoglienze fatte loro da tutti i
Principi Christiani, per doue
sono passati.*

Raccolte da Guido Guaitieri.



IN ROMA. Per Francesco Zannetti.
M. D. LXXXVI.

Con licentia dei Superiori.

譯者の序

天正年間に九州の太友、有馬、大村の三大名が、巡察師父(是等諸侯の書簡に據ると伴天連備怒多道留)アレツサンドロ・ワリニヤニの勸告に従つて血縁の青年二人に扈從の青年二人(他にも一兩人の下人が有つたかも知れぬ、本書第八十八頁(本卷六十五頁)に出づるピエトロといふのが日本人かと疑はれる)を附けて歐羅巴に遣はしたことは、日本吉利支丹史の最も優雅な挿話で、もはや我邦讀書人の普通の常識になつて居り、今更事新しく説くまでもない。然しながら實際にはこの史話は、一昨年四月濱田青陵博士が「天正遣歐使節記」を公にせられるまでは、人々多くは唯、明治十一年太政官本局翻譯係の手に成る「日本西教史」(原本はぜずい、と派のばあで、佛人Jean Crassetの「日本教會史」で知るのみであつた。原本の其部分は主として Guido Guadagni に據り、而も甚だ省略したものであつた上に、譯本には遺憾ながら尠からず誤謬が存した。近年日本吉利支丹宗門の歴史、一般に日本と歐羅巴との世間的或は出世間的の交通の沿革を稽へるの興味が盛になつて、源泉的研窮が少しづつ行はれるやうになるにつれ、予も亦此機運に乗じて、グワルチエリイの著書の兩三章を翻譯して公にしたことがあつた。そは舊著「エス・パニヤ・ボルツガル記」のうちに收められてある。其後爾餘の諸章をも併せ譯したが、時が不利で板上に上す機會が無く、三年の間空しく匣底に藏した。實に本書の翻譯は必ず有るべきであるが、然し一定數の購讀者を獲るといふことは保證し難い。このたび此書が幸に世に出づるやうになつたのは、全く岩波書店主人の俠氣に由るもので、予の厚く感謝する所である。遮莫本書の翻譯者として予は決して適當なものではなかつた。實に予が伊太利亞の書に近いたのはアマチの「奥州記」及び本書を

以て最初のものとなし、その國の語に關する知識は極めて怪しいものである。而も予の尙ほ敢て之を爲したのは、一は伊東、千々石等の青年使者を慈しむ同情に因り、一つは此國の語に熟達せる獨逸の女學士 *Elisa Marguardt* の助力を期待することが出來たからである。女史は當時仙臺に在り、予は女史に就いて、一週間に二時間づつ本書を讀んだ。茲に亦女史に對して深甚の謝意を表はすものである。それでもなほ恐らくは多くの誤が有るだらうと思ふが、この點は大方の諒恕を乞ふのである。

予が本書を譯了したのち、なほ上梓の事を躊躇した一の理由は、本書の翻譯には詳しい註解を附するを必要とし、而して此事の甚だ難いのを看たからである。然るに何の幸ぞや、濱田博士の名著は、予の難しとする所を逸早く完成した。予は安じて本文の翻譯だけを公にするを得るに至つた。

舊臘中始めて最初の校正刷を見ると、譯文が甚だぎごちなく且つ今めかしかった。急に校合の間に之を改め、天正、慶長の慣用語の多くを其間に散布した。然しそれは決して徹底的なるものではなく、當時の口語體を以て翻譯しようといふ意志に因るのでは無い。唯少しく擬古の調子を入れて對境の心持に諧和せしめようと欲したに過ぎぬが、恐らくは却つて無益有害で、文章道を亂るといふ非難を免れないであらう。

本書の對象に關する古刊本の書目を記し、且つその解説を作ること亦必要であるが、是れも亦濱田博士の著書のうちに盡されてゐるから茲には之を省略する。予も亦既記「エスパニヤ・ポルツガル記」のうちに少しく此事に就て記する所が有つた。

若し夫れ彼等四青年が再びワリニヤニに伴はれて日本に歸著した後の事を知らむと欲する者は、ルイス・フロイスの一五九一年、一五九二年の日本書翰に就くべきである。其翻譯は予の既に昭和六年中第一書房より出版せしめたる所である。

昭和八年一月一日

譯者識す

引

グワルチエリイ著す所の日本使節記 [RELATIONI / DELLA VENUTA / DEGLI AMBASCIATA / TORI
GIAPONESI / a Roma sino alla partita di Lisbona. / Con le accoglienze fatte loro de tutti i / Principi
Christiani, per done sono passati. / Raccolte da Guido Guaitieri.] の事に就いては既に雜誌「紙魚」第四冊(昭和二年一月一日發行)に記す所あつたから今ここに詳しくは述べまい。是れには同じ年の出版に係るエネチア板もある。ドン・マンチオ伊東他三人の旅行を記す文獻としては本書の如きはその尤も重要なものの一つである。而してエスパニヤの人 Doctor Buxeda de Leyua ^{フヘズ・デ・レユア} の筆になるサラゴツサ板の日本使節記 [HISTORIA / DEL REGNO DE JAPON &c. / 千五百九十一年板] は予の比較した所では全く前書のカスチリヤ語譯である。各章の標題も其順序も同じいが、中の文章も略一致してゐる。但し其項目に就いて言へば、原本は第七章となるべきを誤つて第六章としてゐるから、最終章は第十五章となつてゐるが實は第十六章である。そのあとになほ數多の書翰の寫がある。カスチリヤ本は十七章ある。即ち第十七章の「日本使節の爲めに催された長老會議

の事」といふが伊太利亞本には章の番號を附してゐない。本文に就いて言へば、亦多少の出入がある。例へば第六章に伊太利亞本に缺けてゐる人名トレドなる *Tod d Medoga* などが出てゐる類である。然しこの比較は後日の機會に譲つて今は述べまい。

唯ちよつと書き添へたいことは、メヂチ氏が「千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題」(笠井鎮夫氏譯「思想」第六十二號)中にブヘダ・デ・レエバの書がエツアルド・デ・サンデ師の著書 *DE MISIONE LEGATORVM JAPONENSIVM*……のカスチリヤ語譯であるやうに書いてゐるのは當を得ないと云ふことである。サンデ師はむしろグワルチエリイの書などに據つたものと見做してよからうと考へられる。總體メヂチ氏は全くグワルチエリイの著書をば閑却してゐる。これ等のいろいろな關係も、エツアルド・デ・サンデ師の著書の解説と共に、予は亦後日之が研究の結果を發表しようと思つてゐる。

さてこのたびは唯グワルチエリイの右の書のうちから、殊にポルトガル、エスパニヤに關係深き部分のみを選んでここに譯出した。それは近く予の上梓せしめむとする「えすばにや、ぼるつがる記」の外篇に挿入せむが爲めである。原本には行を切ることがなかつたが此には近世の體に従つて行を切ることにした。

此伊太利亞古文から予のここに之を譯出することを得たるは、東北大學に勤務する獨逸人マルクワルト嬢に負ふ所が甚だ大である。又予の此書に近いのは、神戸なる友人竹田龍太郎、廣瀬常雄兩君が、その地の圖書館に有る原本に就いて十部の複寫本を作らせ、予にもその一本を配たれたに由るのである。茲にこの事を書いて諸君の厚意を深謝するのである。

凡 例

一、譯語に片假名の振假名を施したのは、原伊太利亞語を示したのである。譯語の妥當ならざるもの有るべきを慮つてかくはなしたのである。此際單複數の語尾の變化は原文の通りにし、敢て邦文の習慣に従つて總てを單數の格に變じなかつた。

一、譯語に邦語ならぬ平假名の振假名を施したのは、天正慶長の頃の本邦吉利支丹の間に用ゐられた不翻語を示したのである。それは概ね葡萄牙語、稀に拉丁語の訛つたものである。かかる不翻語は多くは今人の耳には疎いものであるから、唯譯語の振假名として残したのである。

一、振假名に非ずして、本文と同格の活字に組んだ平假名で、右側に點を附したものは、亦當時の吉利支丹の慣用語で、その不翻語としての性質一層著しく且つ又之を譯せずとも解し易いものである。例へば、す、ず、こ、ん、ば、い、や、の、ば、あ、で、れと云ふが如し。

一、固有名詞にして片假名で現はしたものは概ね伊太利亞語の發音を以てしたのである。例へばその國ではポルトガルと云ふを、ここには伊太利亞風の發音でポルトガルロとなした。一々原國の音を取るのは煩はしいから、多くはかく原本の發音に従つたのである。然し予の調べ得た限りは、其國の綴を括弧の中に書き添へ、「西」、「葡」等の符號を置いてその原國を現はした。又西班牙、葡萄牙等の人名で、その國の綴りの知り難かつたものは、特に「伊」の符號を置いて、その伊太利亞風の綴なるを斷つた。

一、本邦當時の吉利支丹は固有名詞をもまた訛り傳へて一般の慣用とした。たとへばグレゴリオをげれごり

よ、と云ふやうなものである。本書に於ては、唯、ジェズス・クリストの代りに、當時の慣用に従つて、ぜすす・きりし、と書いた他は、多くは原語の發音に近い片假名の表現を用ゐ、敢へて當時の慣用に順はなかつた。一、邦語も亦往々不翻語として原本に出でてゐる。例へばクニシユウ(國衆)の如くである。ヤカタ(屋形)の如きは、複數の場合はヤカチと記されてある。ここに奇なるはトノ(殿)の複數として、或時はトノスの形が用ゐられ、或時はトニの形が用ゐられたことである。かくの如きも亦屢々片假名の振假名として譯語に附し、聊か原文の面影を残すことにした。

一、ぜすすの語を往々アンチック活字を以て印刷したのは、その處に在つて原本に此語が總て頭文字を以て組まれてあるに仿つたのである。

一、原本には第一章の目を關いたが譯本では之を入れた。

一、原本には誤つて第六章が重出する。之に由つて以下の章數が悉く狂つてしまつた。最後の第十五章は實は第十六章である。是れは敢て訂正せず、その儘に止め置き、謬れる數字の側に「ママ」の片假名を附けた。

一、原本は一章のうちに殆ど行を改むることがない。然しこの譯本では、讀者の便を思つて、程よい區切りで、行を易へることにした。

一、官職、僧職の階級、責務等に關しては解し難いものが多かつた。猥りに譯語を當てたが、多くは原語を振假名として之に附して、誤を輕くすることに力めた。稀に原語のままに置いたものもある。

目次

尊師カルチナレ・アツツオリノ台下に上る	三
ジョアンネス・カルガの日本使者の恙なく其祖國に歸るを送る辭	二五
第一章 日本の國及び其民の風俗の事	一六
第二章 使者たちの羅馬に來れる理由の事	二六
第三章 日本發程よりゴア著到までの事	三
第四章 ポルトガルロまでの航海の事	四
第五章 リスボナ入市の次第、附ポルトガル國滯留の事	五
第六章 イスパニヤの旅の事	五
第六章 イ太利亞著到の事、並にフィオレンツア國通過の事	六
第七章 羅馬の旅の事、並に歡迎の次第	七
第八章 ばつばシストオ五選舉の後の事ども	八
第九章 ロレトオ及びボロニヤの旅の事	二
第十章 フェララに於ける歡迎の事	三
第十一章 エネチアに於ける歡迎の事	六

第十二章	マントワの國の事	二〇二
第十三章	ミラノ及びジェノワの國々の事	二〇七
第十四章	リスボナへの旅と印度へ發向の事	二一六
第十五章	彼等が様體並に服裝の事	二二二
	日本おらどるすの爲めに開かれたる樞機員會の事	二二六
	日本の二王一侯よりばつばグレゴリオ十三に奉れる書翰	二二六
	豊後の王ドン・フランシスコより	二二六
	有馬の王ドン・プロタジオより	二二六
	大村侯ドン・バルトロメオより	二二九
	歸依のおらしよ	二三〇
	日本おらどるすに對する答辭	二三八
	聖主シストオ五の日本諸侯に與へたまへる返簡	二三八
	豊後の王フランチェスコに	二三九
	有馬のドン・プロタジオに	二四一
	大村侯ドン・バルトロメオに	二四二

日本使者羅馬著到よりリスボナ出發に至るまでの物語。並にその通過せる諸國王侯の歡迎の事

ガイドオ・グワルチエリイ (Guido Gualtieri) 編纂

羅馬、フランチェスコ・ツァンネツチ (Francesco Zannetti) 板

千五百八十六年。

すべり、おうれすの御許を以て。

尊師カルヂナレ・アツツオリノ台下
(il Signor Cardinale Azzolino)に上る

○

いとも尊きわが君に言す。古き文にも見ゆるが如く、かの知慾に燃え、敢爲の性を有せし古人すらも、なほ能くすることを得ざりしは、啻に南半球のみならず、更にこれを越えて、其後方なるわが地球の北極を究めむとすることにこそありけれ。かのトラヂエヂアの作者セネカ(Seneca)のその詩にていみじうも豫言せしが如く、是等の地の果のいつかは發見し得べきこと、既に人々の推理に由つて斷定せし所なりけり。

かくて數百年の後には

オツエアヌスの神實在の羈絆を解き、

無限の地うち開けて

チフィスの神新世界を見出し

ツウレ地の果に非ざるを知る時

必らずや來るべきなり。

— Venient annis

Secula seris, quibus Oceanus